

【論 文】

《Goin' Home》から《家路》へ ——レコードとラジオ放送が果たした役割——

西 村 理

はじめに

アントニン・ドヴォルザーク Antonín Dvořák⁽¹⁾ (1841～1904) の交響曲第 9 番作品 95「新世界より」の第 2 楽章ラルゴの旋律（以下、「ラルゴの旋律」と表記）は、《家路》というタイトルで親しまれている。音楽ライターの山野雄大は《家路》の様々な演奏を集めた CD のライナーノートで、自身が通っていた小学校でこの旋律が下校時に流されていたと述べている (2004: [1])。沖縄民謡歌手の古謝美佐子^(こじや)のアルバム『天架ける橋』には、沖縄の言葉によって作詞された《家路》が収められているが、プロデューサーの佐原一哉は、この旋律が古謝の住む沖縄県嘉手納町では毎日午後 5 時になると公民館から流れると記している (2001: 19)。

一方、『歌い継がれる名曲案内 音楽教科書掲載作品 10000』には、1949 年から 2009 年までに刊行された小学校、中学校、高等学校の音楽教科書に掲載された作品がまとめられているが、それによると 1952 年から 1996 年まで《家路》も含めて同旋律に歌詞が付けられた曲を掲載した教科書がほぼ毎年、刊行されている (日外アソシエーツ編 2011)⁽²⁾。また教科書ではないものの、『みんなのうた』(光文社) のような小学校で使われている B6 判の歌集でも、《遠き山に日は落ちて (家路)》は長年にわたって掲載されている⁽³⁾。

このように「ラルゴの旋律」は、学校教育の場でも長年にわたって歌われてきているが、日本各地で日々、夕方にスピーカーから流されることによって、この旋律を聴くと夕方という時間や家に帰ろうという感覚が今日の多くの日本人に刷り込まれていると言えるだろう。もちろんこの曲が日本で夕方に流されている理由は、《家路》というタイトルにあると考えられる。《家路》というタイトルは、ドヴォルザークの弟子ウィリアム・アームズ・フィッシャー William Arms Fischer (1861～1948) が作詞し、1922 年に出版した《Goin' Home》の訳語である。では《家路》の歌詞は《Goin' Home》のそれとどのような関係にあるのだろうか。また《家路》はいつからどのような過程を経て日本で知られるようになったのだろうか。これらの問題を明らかにすることが、本論文の目的である。

《家路》がいつから日本で知られるようになったかという問題について、山野雄大は、戦後になっていくつもの《家路》が登場してきたと述べ、そのなかでも「遠き山に日は落ちて」という歌い出しの堀内敬三 (1897～1983) の作詞の《家路》が特に有名であるとしている (2004: [3])。堀内敬三による《家路》は確かに最も広く親しまれているかもしれない。しかし、堀内がこの歌詞をいつ書いたのかははっきりと分かっていない。

《Goin' Home》から《家路》へ

『日本の唱歌（中）大正・昭和篇』では、《家路》は、「大正末ごろ」、すなわち 1925 年頃に成立したとされている（1979: 136）。「あとがき」には、堀内敬三から直接、教えてもらったことがあると記されているので（同書: 393）、「大正末ごろ」というのは堀内本人から聞いたとも考えられる。ただし、堀内敬三の息子の和夫による伝記では、終戦直後に《家路》の歌詞が書かれたとし（堀内 1994: 116-117）、音楽評論家の萩谷由喜子は典拠を明示していないが、堀内敬三が日本語歌詞を付けたのは 1946 年としている（萩谷 2013: 51）。

堀内敬三による歌詞がいつ書かれたかは、今後も調査していく必要があるが、堀内による歌詞が流布していくのは、第 2 次世界大戦後になってからだと考えられる。というのも《遠き山に日は落ちて（家路）》が掲載された最初の教科書の出版が 1962 年（日外アソシエーツ編 2011: 682）、光文書院の歌集『うたのほん』の出版が 1963 年だからである。堀内敬三による歌詞が教科書などで掲載される前にも、すでに 1952 年に《家路》は久野静夫（1912～1998）⁽⁴⁾ による歌詞で掲載されている（日外アソシエーツ編 2011: 227）。さらに国立音楽大学附属図書館が公開している「童謡・唱歌索引」によると、1937 年に出版された『新撰女声曲集 第五巻』に瀬沼喜久雄による《家路》が掲載されている⁽⁵⁾。つまり第 2 次世界大戦以前からすでに「ラルゴの旋律」は《家路》として知られていたのである。従って《家路》が日本で知られるようになった時期を第 2 次世界大戦前に絞ることができる。

ただし「童謡・唱歌索引」は国立音楽大学附属図書館が所蔵する 1912 年から 1945 までに発行された楽譜のみを対象としている。従って、フィッシャーの《Goin' Home》に基づく《家路》がいつから日本で広まったのかを明らかにするために、同図書館が所蔵していない楽譜も調査しなくてはならない。しかし楽譜だけでは十分ではない。ある曲が広まっていく過程を明らかにするために、いつ演奏されたのかも調べる必要がある。ただし《家路》のような小品がいつどこで演奏されたかは記録としてほとんど残らないため、調べることはきわめて困難である⁽⁶⁾。そこで本論文では、楽譜に加えて映画やレコード、ラジオ放送といった当時の新しいメディアに注目することにした。

以下では、まず《家路》の基となったフィッシャーの《Goin' Home》の歌詞の内容を確認し、続いて《Goin' Home》に基づいた戦前の日本語歌詞による楽譜がフィッシャーの歌詞とどのような関係にあるのかを明らかにし、さらに映画やレコード、ラジオ放送での《家路》について検討する。そのことによって 1920 年代半ば以降に音楽が流布していく過程で、レコードやラジオ放送といったメディアも大きな役割を果たしていたことを示したい。なお、本論文の引用文中の旧漢字は原則的に新漢字に改めた。

1. フィッシャーの《Goin' Home》

1.1 交響曲「新世界より」の成立

フィッシャーの《Goin' Home》の歌詞内容を確認する前に、この曲の原曲であるドヴォ

ルザークの交響曲「新世界より」の成立について述べたい。ドヴォルザークは交響曲「新世界より」を1893年1月から5月ニューヨークで作曲し、ボヘミアから呼び寄せた家族とともに6月から9月にかけてアイオワ州のチェコ人居住地スピルヴィルで過ごした。ドヴォルザークがニューヨークに戻ってきた後、交響曲「新世界より」は1893年12月16日にニューヨークのカーネギー・ホールでアントン・ザイドル Anton Seidl (1850～1898) 指揮のニューヨーク・フィルハーモニックによって初演された。なお、完成から初演の間に、第2楽章は当初はアンダンテであったが、テンポを遅くするためにラルゴと書き換えられた。

ドヴォルザークがそもそもアメリカに滞在していたのは、1892年、ニューヨーク・ナショナル音楽院の創立者であるジャネット・サーバー夫人 Jeannette Thurber (1850～1946) からの招きを受けて、この音楽院の院長に就任したからであった。当時、アメリカの国民的な音楽とは何かをめぐる議論がジャーナリズムをにぎわせており、ドヴォルザークもこの議論のなかに巻き込まれていく。そうした状況のなかで初演された交響曲「新世界より」は人々の関心を集め、大絶賛で迎えられた。

ドヴォルザークは、この交響曲の第2楽章と第3楽章とをアメリカの詩人ヘンリー・ワズワース・ロングフェロー Henry Wadsworth Longfellow (1807～1882) の『ハイアワサの歌』にもとづいて作曲した (Winter and Bogdanoff 2008: Direct Testimony)⁽⁸⁾。1855年に書き上げられ、同年にアメリカで出版された『ハイアワサの歌 The Song of Hiawatha』は、アメリカ先住民のオジブワ族に伝わる英雄伝説を基にし、彼らの生活ぶりを盛り込んで、創作されたロングフェローの叙事詩である。ドヴォルザークはニューヨークでサーバーから、この『ハイアワサの歌』をオペラ化するように提案されていた (Beckerman 2003: 17)。第2楽章は、『ハイアワサの歌』によるオペラもしくはカンタータのスケッチであったと、ドヴォルザークはインタビューのなかで述べている (Winter and Bogdanoff 2008: Direct Testimony)⁽⁹⁾。

第2楽章でイングリッシュ・ホルンによって奏でられる旋律に、フィッシャーだけではなく、他のドヴォルザークの弟子のハーヴィー・ウォーシントン・ルーミス Harvey Worthington Loomis (1865～1930) とモーリス・アーノルド Maurice Arnold (1865～1937) も歌詞を付けて、出版している。ルーミスの《Massa Dear》(1923年出版) とアーノルドの《Mother Mine》(1927年出版) である。1922年に出版されたフィッシャーの《Goin' Home》が人気を得ることになったが、3人とも「黒人霊歌 negro spiritual」として歌詞を付けている (Peress 2004: 42)。

「ラルゴの旋律」が黒人霊歌となったのは偶然ではない。ニューヨーク・ナショナル音楽院でアフリカ系アメリカ人のヘンリー・サッカー・バーリー Henry Thacker Burleigh (1866～1949) が学んでいたが、バーリーはドヴォルザークに多くの黒人霊歌を歌って聞かせていた。バーリーの声はイングリッシュ・ホルンの音色を思い起こさせ、彼の歌う《Steal Away》が「ラルゴの旋律」に影響を与えたと考えられている (Beckerman 2003:

《Goin' Home》から《家路》へ

132-133)。つまりドヴォルザークは、アフリカ系アメリカ人の音楽を用いてアメリカ先住民の伝説をもとに創作された『ハイアワサ』によるオペラもしくはカンタータを作曲することを構想していたのである。

ただし、ドヴォルザークが交響曲「新世界より」を作曲する際に、黒人霊歌を参考にしたことをバーリーが書き始めたのは、1911年2月にフィラデルフィア管弦楽団のプログラム・ノートにおいてであった。バーリーは1924年に再びそのことについて触れ、以後たびたび語っている（Beckerman 2003: 127-128）。また「ラルゴの旋律」と《Steal Away》との類似性がジョン・クラハム John Clapham によって指摘されたのも1958年のことであった（Beckerman 2003: 132）。フィッシャーがバーリーが1911年に書いたことを知っていたかどうかは分からないが、ペレスも指摘しているように（Peress 2004: 42）、ドヴォルザークが自分の作曲の学生に「ラルゴの旋律」が黒人霊歌に基づいていることを語っていたと考えられる。

1.2 黒人霊歌としての《Goin' Home》

フィッシャーは、《Goin' Home》の楽譜の序文で、交響曲「新世界より」、弦楽四重奏曲第12番作品96や弦楽五重奏曲第3番作品97が、「アメリカ黒人 American negro の民俗音楽の熱心な研究の成果であり、それらの作品において彼〔ドヴォルザーク〕は黒人の主題を組み込んだのではなく、黒人風に彼自身の主題を創り出した」と述べ、《Goin' Home》について次のように記している。

《ラルゴ》の叙情的な冒頭主題が自然と「Goin' home, goin' home」という言葉を思い起こさせることは当然のことで、その旋律に続く詩行が、黒人霊歌 negro spiritual の形を成すことは交響曲の成立と一致している。（Fischer 1922: [1]）

つまりフィッシャーは交響曲「新世界より」の成立に黒人霊歌が関係あると捉えていた。そのためフィッシャーはアフリカ系アメリカ人ではないが、黒人英語で《Goin' Home》の歌詞を付けている（拙訳は【付録1】を参照）。

ドヴォルザークの交響曲「新世界より」の第2楽章には6小節の序奏があるが、《Goin' Home》は冒頭の4小節を序奏として用いている。この序奏は、ホ長調の主和音で始まり主部の変ニ長調という遠隔調への転調が含まれている。この神秘的な和音進行の序奏に続いて、「Goin' home, goin' home」という歌詞が始まる（【譜例1】）。フィッシャーの歌詞で注目すべきことは、「home」という言葉である。冒頭の「Goin' home, goin' home」での「home」は、第3節で父母も友人たちもいる場所として歌われているので、「家」というよりも「故郷」と解釈できる。しかし、第4節以降で「home」は失うものではなく、すべてが得られ、悩みもない、苦しみもない場所として描かれていることから、「home」がこ

の世の故郷とは別の意味で使われていることに気が付く。第3節最後行の「Home, home, I'm goin' home!」は、第20小節から第24小節（【譜例2】）である。この部分で序奏が音域を2オクターヴ上げて再現される。この部分は主調の変ニ長調で第20小節と第21小節では序奏と同様に遠隔調への転調を期待させ神秘的な雰囲気となるが、転調はせずに主調の変ニ長調に留まる。ここでは強弱記号は序奏よりも強く指示され、第23小節で「home」が強調されている。つまり、第20小節から第21小節で「home」の意味が、文字通りの意味での「故郷」である「地上の故郷」から「天の故郷」へと変化していき、第24小節で「home」が「天の故郷」であることが明確になる。「home」という言葉が「天の故郷」という意味をもつことは、《Goin' Home》が黒人霊歌として歌詞付けされていることとももちろん関係している。つまり、この曲での「home」はキリスト教的な意味ももっている。

【譜例1】 第1小節から第5小節

Largo (♩=52)

Go - in' home, go - in' home,

【譜例2】 第20小節から第24小節

Home, home, I'm go - in' home!

ただし、フィッシャーは「home」に少し異なった意味を重ね合わせていた。《Goin' Home》の楽譜の序文でフィッシャーは次のように述べている。

忘れられないイングリッシュ・ホルン独奏を伴う《ラルゴ》は、はるかかなたの大草原

《Goin' Home》から《家路》へ

の地平線の孤独さとともにドヴォルザークの望郷の念 **homelonging** が流れ出たものであり、アメリカ先住民 **the red man** の過ぎし日のおぼろげな記憶であり、そして「靈歌 **spirituals**」で歌われるアフリカ系アメリカ人 **the black man** の悲劇感である。さらに深く、それは〔《ラルゴ》は〕全人類が感じるあの魂の郷愁 **nostalgia** の感動的な表現である。(Fischer 1922: [1])

ここでの「大草原」とは、ドヴォルザークがスピルヴィルで初めてアメリカの大草原を見たことを指し、その時にドヴォルザークが故郷を思い出したとフィッシャーは述べている。この解説に従うならば、第 19 小節までの前半の歌詞はドヴォルザーク個人の望郷の念を、第 20 小節から後半の歌詞はアフリカ系アメリカ人が思い描くこの世の偏見や苦難に悩まされない天国への帰郷の念を、さらには全人類がもつ天国への帰郷の念を想定して、フィッシャーは歌詞を付けたと捉えられる。このようにフィッシャーは、《Goin' Home》にドヴォルザーク個人の望郷の念と人類の天国への帰郷の念を重ね合わせていた。いずれにせよ《Goin' Home》は「地上の故郷に帰る」と「天の故郷に帰る」という二重の意味をもっているのである⁽¹⁰⁾。このような二重の意味をもつために《Goin' Home》というタイトルを日本語に訳すことは困難である。

2. 《Goin' Home》に基づいた日本語歌詞の楽譜

2.1 作詞か訳詞か

フィッシャーの《Goin' Home》は「地上の故郷に帰る」と「天の故郷に帰る」という二重の意味を持っていたが、いつからフィッシャーの歌詞が日本語歌詞で歌われるようになったのだろうか。《Goin' Home》に基づいて歌詞が付けられる前から、すでに「ラルゴの旋律」に日本語の歌詞が付けられた曲は存在していた。宮沢賢治は 1924 年 8 月 27 日にこの旋律に《種山ヶ原》という歌詞を付けている(佐藤 1995: 119-120)⁽¹¹⁾。また 1930 年に出版された日本国民音楽教育連盟編纂『現代国民音楽教育 第一集 紅き雲』にも、作詞者不明の《秋の姿》が掲載されている(日本国民音楽教育連盟 1930: 4-5)。「ラルゴの旋律」に日本語の歌詞が付けられた曲のなかで、《秋の姿》は初めて出版されたものだと考えられる。そして【表 1】で示したように、1934 年以降、第 2 次世界大戦前までに《Goin' Home》に基づいた日本語の歌詞の曲が出版されていく。

瀬沼喜久雄(1903~1980)⁽¹²⁾と津川主一(1896~1971)の楽譜には、「訳詞」と明記されている一方で、牛山充(1884~1963)と水田詩仙(1895~1987)⁽¹³⁾の楽譜は「訳詞」とも「作詞」とも明記されず、歌詞が牛山充や水田詩仙によって書かれたかのように掲載されている。フィッシャーの歌詞の中心にあるのは、「home」がどのような意味を持とうとも、「home」に思いを馳せることである。「home」への思いが歌詞に含まれているかどうか、フィッシャーの歌詞に基づいているかどうかを考える際に重要となる。

【表 1】

出版年月日	訳者	編曲者	タイトル	所収先
1935/11/5 (修正再版発行、初版発行:1934/9/26)	牛山充	編者 〔男声二部〕	帰郷	若狭萬次郎編『新男子音楽教科書 第三編』東京: 共益商社書店。 なお、同曲のピアノ伴奏は、若狭萬次郎編『新男子音楽教科書 教授用書 第三編』東京: 共益商社書店(1939年2月8日発行)に掲載されている。
1937/3/25(発行)	瀬沼喜久雄(訳詞)	不明 〔独唱、ピアノ伴奏〕	家路(Going Home)	東京教育音楽研究会『新撰女声曲集 第五巻』東京: 東京音楽書院。
1937/6/30(発行)	瀬沼喜久雄(訳詞) 〔英語歌詞も併記〕	不明 〔独唱、ピアノ伴奏〕	家路(Goin' Home)	『家路Goin' Home』東京: セノ音楽出版社。
1938/3/15(発行)	津川主一(訳詞)	津川主一 〔女声三部、ピアノ伴奏〕	家路をさして(Goin' Home)	津川主一編『合唱名曲撰集 女声篇 第四巻』東京: 東京音楽書院。
1938/11/20(発行)	津川主一(訳詞) (フィッシャー作詩)	津川主一 〔無伴奏混声六部〕	家路をさして(Goin' Home)	津川主一編『合唱名曲撰集 混声篇 第五巻』東京: 東京音楽書院。
1939/2/25 (修正再版発行、初版発行:1938/9/28)	水田詩仙	編者 〔女声三部、ピアノ伴奏〕	ふるさとの夢	黒澤隆朝、小川一郎、林幸光編『改訂標準女子音楽教科書 第四編』東京: 共益商社書店。

フィッシャーの歌詞に基づいていない《種山ヶ原》と《秋の姿》について言えば、《種山ヶ原》では岩手県花巻に広がる種山ヶ原の早春の風景が、《秋の姿》では秋の風景が描かれており、「home」への思いが語られていない。牛山充の《帰郷》と水田詩仙の《ふるさとの夢》はどうだろうか。牛山充の《帰郷》はタイトルにすでに「home」の意味を含んでいるが、さらにこの曲は「帰らんいざや ふるさとに」という歌詞で始まり、故郷に父母や友が待っており、悩みもなくなり、故郷に帰ることが歌われている。ただし、牛山充の《帰郷》では、「天の故郷」が歌われる《Goin' Home》の第3節以降が省略されている。従って、牛山充の《帰郷》は、フィッシャーの《Goin' Home》の前半の訳詞と言える。

水田詩仙の《ふるさとの夢》もタイトルにすでに「home」の意味を含んでいるが、この曲は牛山充の《帰郷》とは異なり、第3節以降も含んでいる。《ふるさとの夢》は「夢はたのし ふるさとの」という歌詞で始まり、故郷に思いを馳せていることを示している。さらに掲載された教科書の教師用資料集で、歌詞について次のように解説されている。

「わが心根よ」は故郷を忘れ兼ねる執念深き心である。「六つらの星」はオリオン星座の上に密集して見える星即ちスバル星をさしたもので、他郷にあつて故郷を憧れる心情を詠んだものである。それ程にもふるさとといふものは幾年月、幾山河の隔てなく魂をゆすぶる。(黒澤隆朝、小川一郎、林幸光編 1942: 191)

このように故郷への憧れが歌われる《ふるさとの夢》はフィッシャーの歌詞の訳詞と言えるかもしれない。しかし、《ふるさとの夢》には、「home」の「地上の故郷」の意味が表現されている一方で、「天の故郷」の意味は反映されていない。つまり《Goin' Home》の内容が換骨奪胎され作り変えられている点で、《ふるさとの夢》は翻案となっている。

2.2 訳詞か翻案か

《Goin' Home》から《家路》へ

瀬沼喜久雄の《家路》と津川主一の《家路をさして》には、楽譜に「訳詞」と記されている。これらの歌詞はいずれも訳詞と言えるのだろうか。瀬沼喜久雄の《家路》は、1937年に『新撰女声曲集 第五卷』に最初に掲載された。この曲集は「高等女学校、女子師範学校音楽科等に於ける教材、又は課外教材として編集されたもの」（東京教育音楽研究会 1937: [3]）であったが、《家路》は同年6月にセノオ楽譜⁽¹⁴⁾でも出版された。どちらの楽譜でも、「訳詞」とはなっているが、セノオ楽譜では、瀬沼喜久雄の歌詞と英語の歌詞が併記されている。ただし、原作詞者のフィッシャーの名前は記されず、原詞の第5節と第6節が省略されている。歌い出しは「故郷へかへるよろこびに」となっており、タイトルが《家路》となっても、歌詞には「家」という言葉は登場せず、「home」の意味は「故郷」となっている。また歌詞全体としても、故郷に帰る日の朝の喜びが歌われている。つまり、「訳詞」と記され、英語の歌詞が併記されていても、瀬沼喜久雄の《家路》は「天の故郷」の意味を反映していない点で、フィッシャーの《Goin' Home》の翻案である。

津川主一の《家路をさして》は、いずれも1938年に出版された『合唱名曲撰集 女声篇 第四卷』（以下、『女声篇 第四卷』と表記）と『合唱名曲撰集 混声篇 第五卷』（以下、『混声篇 第五卷』と表記）に掲載された。『女声篇 第四卷』では「古里」となっているのに対して、『混声篇 第五卷』では「故郷」となっているなどの小さな違いはあるものの、歌詞はほぼ同じである。なお『混声篇 第五卷』には、フィッシャーが作詞者であることも示されている。津川主一の歌詞は、「いざやかへらん故郷へ」⁽¹⁵⁾と始まり、父や母が待つ故郷に帰ろうとすることを歌っている点で、「home」のひとつの意味でしか訳していないかのように見える。しかし、フィッシャーの「home」の意味が変わっていく半音階の部分の後、「主よ」という神への呼びかけの言葉が挿入され、最後の歌詞は「主よ ああかへらん いざかへらん」となっている。津川主一は、「主よ」という言葉を入れることによって、帰ろうとしているところが、この世の故郷ではなく「天の故郷」であることを暗示している。津川主一は関西学院で神学を学び、牧師としても活動した人物であるので、「home」という言葉がもつキリスト教的な意味を理解していたと考えられる。従って、津川主一の《家路をさして》は、誰にでも分かるかたちではないものの、フィッシャーの《Goin' Home》の訳詞となっている。

2.3 流布と楽譜出版

翻案にしる訳詞にしる《Goin' Home》に基づく日本語の歌詞は、1934年以降に出版されるようになり、瀬沼喜久雄の《家路》が1937年に『新撰女声曲集 第五卷』とセノオ楽譜の両方で出版され、津川主一の《家路をさして》が1938年に「合唱名曲撰集」の『女声篇 第四卷』と『混声篇 第五卷』の両方に掲載された。つまり1937年には《Goin' Home》に基づく日本語の歌詞はすでに広まっていたと考えられる。ではいつから日本語の歌詞は広まりだしたのだろうか。このことに関して、津川主一の『混声篇 第五卷』の《家路をさ

して》の解説に興味深いことが書かれている。

この編曲は編者が東京シンフォニック・コーラスのためにスコアからなしたもので、帝都は勿論、九州中国近畿等に楽苑の際紹介したものであるが、この度はじめて楽譜として出版さるものである。(津川 1938b: 39)

この内容は『女声篇 第四巻』には記されていないので、津川主一が無伴奏六重唱による《家路をさして》を出版前から演奏していたことが分かる。

次に水田詩仙の《ふるさとの夢》が掲載された『改訂標準女子音楽教科書 第四編』に注目したい。この教科書の改訂前の『標準女子音楽教科書 第一編』には、《ふるさとの夢》は掲載されず、鑑賞曲として交響曲「新世界より」の第2楽章が掲載されていた(黒澤隆朝、小川一朗、林幸光編 1933a: 54)。そしてその教師用の資料集には、教師がピアノで演奏するための編曲が掲載されている(黒澤隆朝、小川一朗、林幸光編 1933b: 257)。一方、『改訂標準女子音楽教科書 第四編』の教師用の資料集で、《ふるさとの夢》は次のように説明されている。

猶この機会に、この名曲の全曲を鑑賞せしめたいと思ふ。実は「新世界より」の鑑賞を有効にさせ度いために、その一部分を合唱曲として此所に出したといった方が穿っているかも知れない。(黒澤隆朝、小川一朗、林幸光編 1942: 191)

このように『改訂標準女子音楽教科書』では、交響曲「新世界より」の第2楽章の扱い方が変わっている。改訂前の1932年(もしくは1933年)の時点で、もし「ラルゴの旋律」が歌詞付きで広く知られていたのであれば、すでに交響曲「新世界より」の第2楽章は歌詞付きで掲載されていたはずである。とすれば、1933年頃から1937年までの間にフィッシャーの《Goin' Home》にもとづく日本語歌詞が広まっていったということになる。

3. 流布とメディア

3.1 映画

フィッシャーの《Goin' Home》にもとづく日本語歌詞が広まっていく過程を調べる上で、津川主一指揮の東京シンフォニック・コーラスの演奏活動は興味深いものだが、筆者の調査の限りでは不明であるため、1930年頃の新しいメディア——映画、レコード、ラジオ放送——に注目することにした。

1922年にアメリカで出版され、人気を得ていたフィッシャーの《Goin' Home》は、1929年に制作されたキング・ヴィダーKing Vidor (1894~1982) 監督の映画(トーキー)『ハレルヤ Hallelujah』で用いられている。『ハレルヤ』は、1930年9月20日に東京の朝日

《Goin' Home》から《家路》へ

講堂でキネマ旬報社主催の「映画鑑賞会特別公開」で上映された後（『読売新聞』1930b: 10）、1930年11月27日から12月3日まで浅草の電気館、新宿の武蔵野館、丸の内の邦楽座で公開された（『キネマ旬報』1930b: 95 および同誌 1931: 277）⁽¹⁶⁾。『ハレルヤ』はキャストがすべてアフリカ系アメリカ人で、彼らの音楽を取り入れた映画として、当時の日本でも音楽関係者から注目されていた（『読売新聞』1930a: 10）。

『ハレルヤ』で《Goin' Home》が用いられるのは最後の場面である。主人公ジークが殺人の罪のために強制労働に従事し、仮釈放で自由になって故郷に帰り、家族らから温かく迎えらるる場面で《Goin' Home》がジークによって歌われる。つまり、『ハレルヤ』では《Goin' Home》は「天の故郷に帰る」という意味では用いられていない。ただしこの映画で歌われる部分は、フィッシャーの歌詞の第3節までであり、「天の故郷」が歌われる部分は省略されている。

『ハレルヤ』のなかで《Goin' Home》が「故郷に帰る」という意味で歌われているが、この映画をきっかけにこの曲が広まったとは考えられない。東京の3つの映画館で1週間だけの上映だったことに加えて、当時の新聞や『キネマ旬報』でのこの映画についての紹介や批評を見ても、《Goin' Home》が言及されることはなく、ドヴォルザークの名前も出てこないからである（『キネマ旬報』1930; 荻野 1930; 『読売新聞』1930c）。

3.2 レコード

ではレコードはどうであろうか。筆者が調査した限りでは、《Goin' Home》に関係のあるレコードのなかで日本で発売されたのは【表2】となる⁽¹⁷⁾。

【表2】

発売年月	演奏者	曲目	レコード番号	典拠
1931年3月発売	シルクレット指揮、エヴァレディ・アワーグループ合唱団、混声合唱（管弦楽伴奏）	南へ: ミドルトン作 家路: フィッシャー作	B3036	『ビクターレコード音譜目録』1931年3月号、p.30。
1935年8月発売	奥田良三、日本ポリドール管弦楽団	夕陽の沈む頃: 西原武男（作詞）、工藤達（編曲） 君を夢みて: 西原武男（作詞）、工藤達（編曲）	2180	『ポリドールレコード月報』1935年8月号、p.1。
1936年8月発売	杉町みよし、日本ビクター管弦楽団	家路: 佐伯孝夫（訳詞）、ドヴォルザーク（作曲）、飯田信夫（編曲） 東洋風子守唄: 佐伯孝夫（訳詞）、パワーズ（作曲）、飯田信夫（編曲）	13478	『ビクターレコード邦楽新譜』1936年8月号、p.1。
1938年1月発売	トミー・ドーシーと其管弦楽団	家路: ドヴォルザーク（作曲）、ドーシー、マストレン（編曲） ユモレスク: ドヴォルザーク（作曲）、ドーシー、ウエイトステイン（編曲）	JA1007	『ビクター洋楽レコード』1938年1月号、p.7。

ナサニエル・シルクレット Nathaniel Shilkret（1889～1982）指揮のエヴァレディ・アワー・グループ合唱団 Eveready Hour Group によるレコードは、アメリカで1927年に録音され発売されているが⁽¹⁸⁾、日本国内では1931年3月に発売された。それ以前にも、ビクターにレイナルド・ウェレンラス Reinald Werrenrath（1883～1953）が1923年に《Goin' Home》を録音し、アメリカで発売している⁽¹⁹⁾。

いずれにしてもフィッシャーの《Goin' Home》が初めて《家路》と表記されたのは、1931年3月発売のシルクレット指揮のレコードだったと考えられる。『ビクター・レコード音譜目録』（1931年3月号）には、「フィッシャー作」と記されている。解説内で《家路》がドヴォルザークの交響曲「新世界より」第2楽章によるものだということが述べられているものの、歌詞の訳やその内容は紹介されていない（1931: 30）。同誌によればレコードには解説カードが付いていることが書かれているが、そこに歌詞の訳やその内容が記されていたかは不明である。

奥田良三の《夕陽の沈む頃》は、『SP 盤復刻選集 若き日の奥田良三』の解説では「夕陽の沈む頃（家路）」と表記されているが（1993: 61）、『ポリドールレコード月報』（1935年8月号）には「（家路）」および原曲の作曲者であるドヴォルザークの名も記されていない（1935: 1）。つまり、当時は《夕陽の沈む頃》は「（家路）」として知られていなかったと考えられる。西原武男による歌詞は、故郷を偲ぶもので、フィッシャーの《Goin' Home》の翻案と考えられるものの、「流行歌」として発売されているため編曲も自由で、原曲の序奏の部分は省略されている。

杉町みよし²⁰⁾の歌う《家路》は、『ビクターレコード邦楽新譜』（1936年8月号）でドヴォルザークの作曲の交響曲「新世界より」の第2楽章に基づく曲として紹介されている（1936: 1）。佐伯孝夫（1892～1981）による歌詞では、《Goin' Home》の歌詞のなかの「天の故郷」が描かれている部分が省略され、編曲でも原曲の序奏と同じ音楽は間奏で挿入されていない²¹⁾。

トミー・ドーシー〔ドーシー〕Tommy Dorsey（1905～1956）は当時の日本でもジャズ奏者として知られ、1937年夏以来、クラシックの名曲をスウィングに編曲していた（唐端勝、野川香文、青木正 1938: 161）。『ビクター洋楽レコード』1938年1月号では、ドーシーによるこうした録音が、「最近名曲のジャズ化に、大向ふ大喝采」と述べられ、今回のレコードも「一般向軽音楽として大歓迎のもの」と記している（1938: 7）。ドーシーの演奏では歌は入らないが、この曲はドヴォルザークの交響曲「新世界より」第2楽章による《家路》として発売されているため、《家路》というタイトルが、1938年1月には流布していたことを示している。このことは日本語歌詞の楽譜について考察した本論文の「2.3」の内容とも一致している。

ドーシー以外には、《家路》というタイトルのレコードは、1931年のシルクレット指揮のものと1936年の杉町みよしのものであったが、どちらかのレコードがこの曲を広める役割を果たしたのだろうか。杉町みよしが録音する時点で、すでに《家路》というタイトルは定着していたのだろうか。そのことを明らかにするために、ラジオ放送を検討する。

3.3 ラジオ放送

1925年に東京、大阪、名古屋で放送局が設立されラジオ放送が開始された。当初は3

《Goin' Home》から《家路》へ

局が独立していたが、1926年に「社団法人日本放送協会」として統合され、さらに放送局も日本各地に作られていく。1931年4月6日から第2放送がまず東京で、1933年6月から大阪と名古屋でも始まった。しかし、東京、大阪、名古屋以外では、第2放送が実現されなかったため、1939年7月から第2放送は「都市放送」、第1放送は「全国放送」と呼ばれるようになった。

こうした状況のなか《家路》もしくはそれに類するタイトルの曲はどの程度、放送されていたのだろうか。NHK放送博物館所蔵の東京放送局（以下、JOAKと表記）および大阪放送局（以下、JOBKと表記）の『番組確定表』に基づいて、1925年から第2次世界大戦前までの記録を整理した（【付録2】）⁽²²⁾。さらに番組内容について『読売新聞』も参照した。というのも『読売新聞』は、1925年11月15日から2頁に及ぶ「よみうりラヂオ版」を常設し、他紙よりもラジオ放送に関する情報が充実しているからである。山口誠によれば、『読売新聞』がJOAKの放送と密接な関係をもっていた（2010: 120f）。音楽番組についても、『読売新聞』には『東京朝日新聞』や『東京日日新聞』よりも詳しい情報が掲載され、同じ内容の記事が他紙で掲載されていることがあっても、他紙より情報が少ないことはない。ただし、『読売新聞』は当時は東京版のみで、大阪版を発行していなかったため、JOBKの番組内容について『大阪朝日新聞』や『大阪毎日新聞』で確認した。

【付録2】に基づいて、レコードの放送も含め、《家路》とそれに類するタイトルの曲が放送された回数を集計したのが【表3】である。年毎の回数はJOAKとJOBKでの合計であるが、（ ）内には放送されてなかった回数が記されている。たとえば1932年にはJOBKでは1回放送されていないということになる。

【表3】

年	1932	1933	1934	1935	1936	1937	1938	1939	1940	1941
回数	1 (JOBK -1)	0	1	2	2	4 (JOAK -1)	5 (JOAK -2)	6 (JOBK -2)	2 (JOBK -1)	4 (JOBK -2)

【表3】が示すように、《家路》とそれに類するタイトルの曲は1932年に初めて放送され、1937年から1939年にかけて放送回数を増やしていくが、1941年12月にアメリカとの戦争が始まると、1942年から第2次世界大戦終まで放送されなくなった。というのは、ドヴォルザークはアメリカ人ではないものの、この曲は敵国と関係する音楽とみなされていたからである。アメリカの独立記念日である7月4日に注目すると、1932年、1935年、1937年に《家路》は放送されている。しかも『読売新聞』で《家路》が放送される番組に付けられた見出しは、1932年には「米国の独立記念祭を祝福する演奏」（1932: 5）、1935年には「アメリカの音楽」（1935: 15）、1937年には「アメリカ音楽」（1937: 10）というものであった。なお、交響曲「新世界より」全曲も1942年以降は放送されなくなり、演奏会では演奏されていたものの、戦局が悪化していくと1943年2月26日にはヨーゼフ・

ローゼンシュトック Joseph Rosenstock (1895～1985) 指揮の大東亜交響楽団の演奏会で、この曲は急遽、チャイコフスキーの交響曲第 6 番「悲愴」に変更されている (久保田 1943: 9) ⁽²³⁾。

《家路》が初めて放送されたのは、1932 年 7 月 4 日のアメリカの独立記念日で午後 8 時から 30 分間の「合唱と管弦楽」という番組のなかである。演奏は佐藤清吉の指揮によるものがある。この時に《家路》は何語で歌われたのだろうか。1931 年 3 月に発売されたシルクレット指揮のエヴァレディ・アワー・グループ合唱団によるレコードで《家路》は英語で歌われていても、タイトルのみが日本語に訳されていたことから、日本人であっても、歌詞は英語であった可能性がある。この時に限らず、《家路》やそれに類するタイトルの曲が日本人によって演奏された際に、「番組確定表」で「訳詞者」が記されていない場合、何語で歌われたのかという問題を考えなくてはならない。そこで『読売新聞』を参照しながらレコード以外での《家路》やそれに類するタイトルの曲の放送を検討し、いつからこの曲が日本語歌詞で歌われるようになったのかを考察したい。

1932 年 7 月 4 日の『読売新聞』には、次のように説明されている。

これはドヴォルザークの有名な「新世界交響曲」の第 2 楽章の中心主題があまりに美しく、また郷愁的な旋律なので、弟子であつたフィッシャーがこれに家路といふ言葉をつけて合唱曲に編んだもの (1932: 5)

ここでは、《家路》がドヴォルザークの曲でフィッシャーが歌詞を付けて編曲したものであることが示され、「故郷」という言葉は使われずに、「家へ帰る」ことを中心にした歌詞の大意が書かれている。もしこの時に日本語で歌われたのなら、歌詞の大意を書く必要はないと考えられるので、《家路》は英語で歌われたと考えられる。

1934 年 7 月 24 日の放送で、《家路》は、『読売新聞』には「英語の合唱」と記され、「家へ帰らう、故郷の家へ」という書き出しで、故郷の家に思いを馳せる歌詞の大意が掲載されている (1934: 15)。1935 年 7 月 4 日のアメリカの独立記念日の放送では、『読売新聞』で《家路》は「フィッシャーが歌詞をつけた郷愁の色濃いうた」と紹介され、英語で歌われることが記されている (1935: 15)。

1936 年 8 月 16 日には「アマチュア音楽」という番組のなかで《家路へ》が放送された。この番組は午後 7 時 50 分から JOAK、午後 8 時 20 分から JOBK、午後 9 時 10 分から名古屋放送局 (以下、JOCK と表記) から番組が放送されている (『大阪朝日新聞』1936: 14) ⁽²⁴⁾。JOBK から放送された《家路へ》は、関西学院の卒業生のグループである新月合唱団によって英語で歌われた (『読売新聞』1936: 10a)。

1936 年 9 月 22 日には、関西学院出身の津川圭一指揮の東京シンフォニック・コーラスによる《故郷へ》が放送されている。津川は 1938 年出版の『混声篇 第五巻』に《家路をさして》を掲載している。《家路をさして》は津川による無伴奏混声六部への編曲と訳詞で

《Goin' Home》から《家路》へ

あったが、1936年9月22日の時点では、編曲は同じ編成であったものの、《故郷へ》は英語で歌われた（『読売新聞』1936b: 10）。

1937年1月24日には「学生青年の音楽」という番組のなかで《家路へ》は放送された。この番組も、「アマチュア音楽」と同様に3つの放送局によって分担され、午後7時30分からJOAK、午後8時30分からJOBK、午後9時10分からJOCKから放送された。JOBKから放送された《家路へ》が英語で歌われたかどうかは、『読売新聞』には記されていない。ただしこの番組内で他の外国の曲が日本語で歌われる場合、「訳詞者」が明記されているのに対して、《家路へ》には「神戸商大グリークラブ編曲」とのみ記され、「訳詞者」は書かれていないので、この曲は英語で歌われたと考えられる。1937年7月4日のアメリカの独立記念日の放送では、《家路》は『読売新聞』では英語で歌われ、歌詞の大意が家に帰る喜びを歌うものであると記されている（1937: 10）。

以上のように1932年7月4日から1937年7月4日まで《家路》もしくは《家路へ》として放送された曲では、タイトルは日本語であっても、歌詞は英語のままであった。さらに歌詞が新聞で紹介される際に、家や故郷に帰るという内容が掲載されたことがあっても、「天の故郷」に帰るという意味が述べられることはなかった。日本語歌詞で《家路》が初めて放送されたのは、JOAKでは放送されなかったものの、1937年12月5日であった。この時に《家路》は瀬沼喜久雄による日本語歌詞で放送されたが、すでにその日本語歌詞は『新撰女声曲集 第五巻』の中で発表され、またセノオ楽譜としても出版された後のことであった。

JOAKとJOBKの両方で《家路》が日本語歌詞で放送されたのは、さらに後のことである。1938年11月16日には《故郷へ》とタイトルで《家路》が放送された。しかし、この時は英語で歌われた（『読売新聞』1938b: 6）。1938年12月4日にも瀬沼喜久雄による日本語歌詞で《家路》が放送されているが、この時もJOAKは別の番組であった。JOAKとJOBKともに日本語歌詞で《家路》が放送されたのは、1938年12月23日のことであった。この時、《家路》は津川主一による日本語歌詞で放送されたが、出版譜とはタイトルは異なるものの、その日本語歌詞はやはり楽譜出版後のことであった。

その後、『番組確定表』に「訳詞者」が記された《家路》やそれに類するタイトルの曲が放送されていくようになっていく。しかし、1939年6月25日だけは《家路》は、「訳詞者」も記されておらず、英語で歌われることも明記されていない。この時、番組内で他の外国の曲が日本語で歌われる場合、「訳詞者」が記されているのに対して、《家路》では書かれていないので（『読売新聞』1939: 6）、この曲は英語で歌われたと考えられる。1932年から1941年で《家路》とそれに類するタイトルの曲が何語で歌われたのかを整理したのが【表4】である（この表には1939年6月18日や1941年9月13日の歌詞を伴わない器楽のみによる放送は含まれていない）。

【表 4】

	1932	1933	1934	1935	1936	1937	1938	1939	1940	1941
レコード(英語)	0	0	0	1	0	1	2 (JOAK -1)	1	0	0
英語歌詞	1 (JOBK -1)	0	1	1	2	2	1	1	0	0
日本語歌詞	0	0	0	0	0	1 (JOAK -1)	2 (JOAK -1)	3 (JOBK -1)	2 (JOBK -1)	3 (JOBK -2)

【表 4】が示すように、《家路》は当初はタイトルのみ日本語と記され、歌詞は英語で歌われていたが、瀬沼喜久雄による日本語歌詞の楽譜が出版された年の 1937 年に《家路》は日本語歌詞で放送されるようになった。そして英語歌詞での放送と併存しつつも、《家路》は日本語歌詞での放送回数を次第に増やしつつ、1939 年 8 月以降は日本語歌詞でのみ放送されるようになった⁽²⁵⁾。

このように《家路》が日本語歌詞で放送されていくなか、1939 年 6 月 18 日や 1941 年 9 月 13 日には、歌が伴わない器楽でのみの演奏でも、交響曲「新世界より」の第 2 楽章が《家路》というタイトルで放送されるようになった。この時期でもオーケストラがこの交響曲の第 2 楽章を抜粋で演奏する場合には「第 2 楽章」とだけ記され放送されていたし⁽²⁶⁾、1920 年代には編曲の場合、1928 年 2 月 11 日の明治大学音楽学部ハーモニカソサエティのハーモニカ合奏では『新世界交響曲』中ラルゴー (JOAK)、1929 年 12 月 1 日の青柳振作のハーモニカ独奏では「ラルゴ (新世界交響曲より)」 (JOAK) と記されていた。つまり、1920 年代には交響曲「新世界より」の第 2 楽章は「ラルゴ」として知られていたが、1930 年代末には《家路》として広く親しまれるようになったのである。

結び

日本語歌詞の楽譜、映画、レコード、ラジオ放送について、「ラルゴの旋律」に日本語歌詞の付けられたものを検討してきた結果、1931 年 3 月に発売されたシルクレット指揮のレコードによって、《Goin' Home》は《家路》として知られるようになり、1932 年 7 月から《家路》は英語歌詞で放送されるようになった。1934 年 9 月に牛山充による日本語歌詞の《帰郷》が出版され、1936 年 8 月にアメリカで活躍した杉町みよしが歌う《家路》のレコードも発売された。現在、確認できた限りで《Goin' Home》が《家路》のタイトルもとで初めて日本語歌詞で歌われたのが、杉町のレコードであった。そして 1937 年に瀬沼喜久雄による日本語歌詞の《家路》が、1938 年に津川主一による日本語歌詞の《家路をさして》が出版されると、《家路》やそれに類するタイトルの曲が日本語歌詞で放送されるようになった。つまり、1931 年から 1935 年まで《家路》が英語歌詞で広まっていく段階でも、さらに 1936 年から日本語歌詞で歌われるようになっていく段階でも、レコードやラジオ放送といった新しいメディアが大きな役割を果たしたと考えられる。

《Goin' Home》から《家路》へ

もちろんレコードやラジオ放送だけが《家路》の流布に貢献したのではない。《家路をさして》が掲載された『混声篇 第五巻』で記されているように、津川圭一はこの曲を東京や九州、中国、近畿等でも演奏していた（1938b: 39）。その時期がいつなのかははっきりしないが、津川の指揮で英語歌詞での演奏が放送された 1936 年 9 月 22 日以降のことだと考えられる。いずれにしても津川圭一は《家路》が流布していく過程で、演奏会、ラジオ放送、楽譜のいずれにも関わっていた。

また《家路》やそれに類するタイトルの曲が教科書に掲載されたことも忘れてはならない。牛山充の《帰郷》が掲載された『新男子音楽教科書 第三編』（1934 年）は師範学校や中学校の音楽科のために、瀬沼喜久雄の《家路》が掲載された『新撰女声曲集 第五巻』（1937 年）および水田詩仙の《ふるさとの夢》が掲載された『改訂標準女子音楽教科書 第四編』（1938 年）は女子師範学校や高等女学校の音楽科のために編纂された楽譜であった。このように教科書に掲載されていたので、《家路》やそれに類するタイトルの曲は「教員と家庭の夕」（1939 年 11 月 19 日）や「中等学生の時間：唱歌と音楽」（1940 年 2 月 1 日）といった番組のなかで放送されたのである。

従って、レコード、ラジオ放送、演奏会、楽譜、学校教育の相互作用によって《家路》は日本で知られるようになったと言える。しかし、《Goin' Home》が《家路》として流布していく過程で、津川圭一を除けば、フィッシャーの《Goin' Home》の歌詞における「home」がもつ二重の意味のうち、文字通りの意味での「故郷」のみが広まり、「天国の故郷」という意味は意識されることはなかった。そのことは、原曲の捉え方にも変化をもたらしたのではないだろうか。「ラルゴの旋律」は、《家路》として広まる前から日本でも器楽曲として親しまれてきた。日本では遅くとも 1919 年 7 月 20 日には日比谷公園音楽堂で横枕文四郎指揮の東京派遣海軍軍楽隊によって第 2 楽章のみが演奏されているし（谷村 2010: 134）、その後も《家路》として広まっていく一方で、第 2 楽章のみが演奏会でとりあげられ、また放送もされてきた。

《家路》が人口に膾炙していくとともに、「ラルゴの旋律」は、故郷に思いを馳せることやドヴォルザークの郷愁と結び付けられるようになり、そのことは交響曲「新世界より」全体の捉え方にも変化をもたらしていったのではないだろうか。

この問題を考えるのに、1938 年 2 月 19 日の第一放送の「名曲ファンタジー」は興味深い例となっている。JOAK によって始められたこの番組では、物語仕立てで名曲に付けられた歌詞がレコードによる演奏を伴奏にして歌われる。ドヴォルザークの交響曲「新世界より」では、JOAK 教養部の水野忠恂が付けた歌詞が、レオポルト・ストコフスキー指揮のフィラデルフィア管弦楽団のレコードで放送された。水野による物語は、黒人の娘スザンナが奴隷解放のために出征した恋人トミーを案じながら、父と妹とともに待っているというものである。「名曲ファンタジー」では、第 1 楽章、第 2 楽章、第 4 楽章が放送されたが、第 1 楽章ではトミーを想うスザンナの様子、第 2 楽章では故郷に帰る喜び、第 4 楽章ではトミーが帰ってくるも、再び出征していくことが歌われた（『読売新聞』1938a: 10）²⁷⁾。

つまり、故郷に思いを馳せることと結び付けられた第2楽章が中心となって、交響曲「新世界より」の物語が構成されているのである。この例が示すように、「ラルゴの旋律」が《家路》として知られるようになっていく中で、交響曲「新世界より」全体の捉え方が変化していったことは間違いない。この問題については、稿を改めて演奏会のプログラム・ノートやレコードの紹介文などの言説を検討しながら詳細に論じたい。

注

(1) Dvořák の表記は「ドヴォジャーク」がチェコ語の発音に一番近い。例えば、美術史家の Max Dvořák (1874~1921) の場合、通常このように記されるが、作曲家では「ドヴォルザーク」もしくは「ドヴォルジャーク」と記されることが多い。本稿では、一般に流布していると考えられる「ドヴォルザーク」とする。

(2) 小学校 4、中学校 72、高等学校 16、計 92 の教科書で掲載されている。多くの作詞者が《家路》としているが、他に《ふるさとの夢》や《家路をさして》《去りし日に》《道はるか》《遠きかなた》《郷愁》《遠き山に日は落ちて》がある。なお《遠き山に日は落ちて》は堀内敬三による作詞の《家路》の歌い出しをタイトルにしている。

(3) 2004 年 8 月 6 日の電子メールでの問い合わせへの回答によると、光文書院は『みんなのうた』(B6 判) を 1963 年から出版しているが、当初から堀内敬三の《遠き山に日は落ちて》を「キャンプや林間学校で歌う歌」として掲載している。なお、2013 年現在の『みんなのうた』でも同曲は掲載されている。

(4) 本名は、市川都志春 (日本著作権協議会編 2002)。

(5) 「童謡・唱歌索引」(2013 年 9 月 30 日参照) によると、国立音楽大学附属図書館の所蔵楽譜には、他にも「ラルゴの旋律」に歌詞が付けられた曲に作詞者不明《秋の姿》(1930 年)、牛山充《帰郷》(1939 年)、水田詩仙《ふるさとの夢》(1939 年) がある。牛山充の《帰郷》は同図書館所蔵の『新男子音楽教科書 教授用書 第三編』に掲載されたものである。ただし「教授用書」に先だって、1934 年に『新男子音楽教科書 第三編』が「生徒用」として出版され、《帰郷》は同書に掲載されている。

(6) 1927 年 11 月 26 日に宝塚交響楽協会主催で「ミュージック・オリムピック・ゲーム」が開催され、大阪外語グリークラブが「新世界交響楽 (ドボルヂヤツク作)」を歌っている (『大阪毎日新聞』1927: 9)。長井は、この時に大阪外語グリークラブが「ドヴォルザークの新世界よりゴーイングホームを恐らくは初演した」(1948: 9) と述べている。

(7) 当時のアメリカの国民音楽をめぐる議論とドヴォルザークとの関係は、ベッカーマンの著作の第 3 章「Dvořák among the Journalists」で詳しく論じられている (Beckerman 2003: 77-122)。

(8) Arthur Mees, "Synopsis of Compositions...", On December 15 and 16, 1893,

《Goin' Home》から《家路》へ

Philharmonic Society of New York Fifty-Second Season, 1893-1894.

(9) [Albert Steinberg?], "Dr. Dvorak's Great Symphony," NY Herald (December 16, 1893).

(10) ヴィンターとボグダノフも「home」の二重の意味を指摘している (Winter and Bogdanoff 2008: Side Trips)。またベッカーマンは、ドヴォルザークが『ハイアワサの歌』の「家路の旅」と「森の葬式」の場面で用いようとした音楽によって第2楽章を構成したことを明らかにし、フィッシャーがそのことを知っていた確かな証拠はないものの、そうした第2楽章の構成が、《Goin' Home》の歌詞内容と重なっていることを指摘している (Beckerman 2003: 25-39)。

(11) 宮沢賢治は、1924年頃に書いた『銀河鉄道の夜』で楽章を示していないが「新世界交響曲」について触れている。天沢退二郎によると、『銀河鉄道の夜』は1924年頃に書かれた第1稿の後、最終稿の第4稿に至るまで改訂しているが (宮沢 1985: 584)、第1稿から「新世界交響曲」は登場している (宮沢 1985: 465)。

(12) 本名は、青木正 (エディット 90 1991: 149)。青木正は「青木爽」の名でも活動していた (日本著作権協議会編 2002)。

(13) 本名は、黒沢隆朝 (日本著作権協議会編 2002)。

(14) セノオ楽譜とは、妹尾幸陽 (1891~1961) が設立したセノオ音楽出版社によるピースの楽譜のことで、竹下夢二 (1884~1934) がその表紙画の多くを描いたことでも知られている。

(15) 『女声篇 第四巻』では、「いざや帰らん古里へ」となっている。

(16) 『キネマ旬報』(1930b: 95) にこれらの映画館で『ハレルヤ』が11月27日から上映されることが記され、同誌 (1931: 277) にはこれらの映画館で12月4日から別の映画が上映されていることが記されている。そのことから『ハレルヤ』は12月3日まで上映されていたと考えられる。

(17) 本論文の論点が《Goin' Home》に基づく日本語の歌詞がいつから広まったかにあるので、ドヴォルザークの交響曲第9番「新世界より」の全曲や第2楽章のみ、さらにクライスラー編曲の《Negro Spiritual Melody》のレコードは除いた。

(18) カリフォルニア大学サンタ・バーバラ校が公開している「Encyclopedic Discography of Victor Recordings」による。 http://victor.library.ucsb.edu/index.php/matrix/detail/800012656/CVE-38396-Goin_home (Accessed October 6, 2013).

(19) 「Encyclopedic Discography of Victor Recordings」による。 http://victor.library.ucsb.edu/index.php/matrix/detail/800001949/C-27953-Goin_home (Accessed October 6, 2013).

(20) 杉町みよしの名は、現在ほとんど知られていないが、当時の新聞記事によればアメリカで活躍したソプラノ歌手でサンフランシスコで《蝶々夫人》を歌い名声を得て (『東京朝日新聞』1933: 9)、帰国に際して「第2の環夫人」として写真付きで紹介されている (『東

京朝日新聞』1935: 2)。

(21) 杉町みよしが歌う《家路》は国立国会図書館デジタル化資料「歴史的音源」で聴くことができる。<http://rekion.dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1328964> (2013 年 7 月 10 日参照)。

(22) 現段階で、番組確定表が保管されているのが確認できたのは、この 2 局だけである。

(23) ローゼンシュトックはこの曲が「戦時中、日本のプログラムから追放されていた」と記している (1980: 100)。

(24) 『大阪朝日新聞』にのみ、どの放送局が何時から放送するかについては記されているが、同紙には具体的な曲目は掲載されていない。

(25) 1939 年 8 月以降に英語歌詞で《家路》が放送されなくなったのは、同盟国であったドイツが 1939 年 9 月にイギリスと開戦したからかもしれない。

(26) たとえば 1938 年 12 月 24 日に第 1 放送での山本直忠指揮の中央交響樂團による演奏。

(27) 「名曲ファンタジー」の交響曲「新世界より」の台本は、NHK 放送博物館には所蔵されていない。

参考文献

Beckerman, Michael. 2003. *New Worlds of Dvořák: Searching in America for the Composer's Inner Life*. New York: Norton.

Dvořák, A[ntonín]、瀬沼喜久雄訳詞 1937 『家路 Goin' Home』東京：セノオ音楽出版社。

Dvořák, Anton [sic], Words and adaption by William Arms Fischer. 1922. *Goin' Home. From the Largo of the Symphony "From the New World," Op.95*. Philadelphia: Oliver Diston.

ドヴォルザーク 2009 『家路～新世界より～』King Records、KICC511。

エディット 90 (編集協力) 1991 『昭和の歌——時代を彩った 511 曲と思い出の昭和史』(小学館 CD ブック) 東京：小学館。

EDVR Project Staff. "Encyclopedic Discography of Victor Recordings." Accessed October 6, 2013. <http://victor.library.ucsb.edu/index.php>.

福田俊二、加藤正義編 1994 『昭和流行歌総覧 (戦前・戦中編)』東京：柘植書房。

唐端勝、野川香文、青木正 1938 『軽音楽とそのレコード』東京：三省堂。

萩谷由喜子 2013 『宮澤賢治の聴いたクラシック』東京：小学館。

堀内和夫 1992 『「音楽の泉」の人、堀内敬三』東京：芸術現代社。

金田一春彦、安西愛子編 1979 『日本の唱歌 (中) 大正・昭和篇』東京：講談社。

『キネマ旬報』 1930a 「各社近着外国映画紹介 ハレルヤ」第 366 号 (1930 年 5 月 21 日号) : 20-21。

『キネマ旬報』 1930b 「全国十大都市常設館 番組一覧表」第 386 号 (1930 年 12 月 11 日号) : 95。

《Goin' Home》から《家路》へ

- 『キネマ旬報』 1931 「全国十大都市常設館 番組一覧表」第 387 号（1931 年 1 月 1 日号）：277。
- 古謝美佐子 2001 『天架ける橋』Disc Milk、DM002。
- 国立国会図書館デジタル化資料「歴史的音源」2013 年 7 月 11 日参照。<http://rekion.dl.ndl.go.jp/>。
- 久保田公平 1943 「大東亜交響楽団演奏」『音楽文化新聞』第 43 号（3 月 20 日）：7。
- 国立音楽大学附属図書館 2012 「童謡・唱歌索引」2013 年 9 月 30 日参照。
<http://www.lib.kunitachi.ac.jp/collection/shoka/shoka.htm>。
- 黒澤隆朝、小川一朗、林幸光編 1933a（修正再版発行）『標準女子音楽教科書 第一編』東京：共益商社書店（1932 年初版発行）。
- 黒澤隆朝、小川一朗、林幸光編 1933b 『女子音楽教授資料集成 標準女子音楽教科書 第一編 教師用』東京：共益商社書店。
- 黒澤隆朝、小川一朗、林幸光編 1939（修正再版発行）『改訂標準女子音楽教科書 第四編』東京：共益商社書店（1938 年初版発行）。
- 黒澤隆朝、小川一朗、林幸光編 1942（再版発行）『改訂標準女子音楽教授資料集成 改訂標準女子音楽教科書 第四編 教師用』東京：共益商社書店（1938 年初版発行）。
- 宮沢賢治 1985 『宮沢賢治全集 7』東京：筑摩書房。
- 長井斉 1948 「合唱コンクール回顧——関西の巻」『合唱の友』第 1 巻第 1 号：9。
- 日外アソシエーツ編 2011 『歌い継がれる名曲案内 音楽教科書掲載作品 10000』東京：日本アソシエーツ、紀伊国屋書店（発売）。
- 日本国民音楽教育連盟編纂 1930 『現代国民音楽教育 第一集 紅き雲』東京：日本国民音楽教育連盟。
- 日本著作権協議会編 2002 『著作権台帳 CD-ROM』著作権協議会編集局。
- 荻野寧 1930 「読者寄書欄 評論「ハレルヤ」（賞）」『キネマ旬報』第 380 号（1930 年 10 月 11 日）：55-56。
- 奥田良三 1995 『SP 盤復刻選集 若き日の奥田良三』ポリドール株式会社、POCH-1496/9。
- 『大阪朝日新聞』 1936 「ラヂオ」1936 年 8 月 16 日（朝刊）：14（朝日新聞戦前紙面データベース）。
- 『大阪毎日新聞』 1927 「ミュージック・オリムピック・ゲーム プログラム」1927 年 11 月 24 日（朝刊）：9（毎索）。
- Peress, Maurice. 2004. *Dvořák to Duke Ellington: A Conductor Explores American's Music and Its African American Roots*. New York: Oxford University Press.
- 『ポリドールレコード月報』 1935 1935 年 8 月号：1。
- 佐藤泰平 1995 『宮沢賢治の音楽』東京：筑摩書房。
- ローゼンストック、ジョセフ 1980 『ローゼンストック回想録——音楽はわが生命』中

村洪介訳、日本放送出版協会。

谷村政次郎 2010 『日比谷公園音楽堂のプログラム——日本吹奏楽史に輝く軍楽隊の記録』東京：つくばね社。

『東京朝日新聞』 1933 「歌劇「さくら」の主演 杉町みよし夫人近く帰朝」1933年8月22日（朝刊）：9（朝日新聞戦前紙面データベース）。

『東京朝日新聞』 1935 「第2の環夫人、近く帰朝」1935年11月20日（朝刊）：2（朝日新聞戦前紙面データベース）。

東京教育音楽研究会 1937 『新撰女声曲集 第五巻』東京：東京音楽書院。

津川主一編 1938a 『合唱名曲撰集 女声篇 第四巻』東京：東京音楽書院。

津川主一編 1938b 『合唱名曲撰集 混声篇 第五巻』東京：東京音楽書院。

『ビクター・レコード音譜目録』 1931 1931年3月号：30。

『ビクターレコード邦楽新譜』 1936 1936年8月号：1。

『ビクター洋楽レコード』 1938 1938年1月号：7。

Vidor, King. 2006 『ハレルヤ Hallelujah』(1929) ワーナー・ホーム・ビデオ、DL-67676。

若狭萬次郎編 1935（修正再版発行） 『新男子音楽教科書 第三編』東京：共益商社書店（1934年初版発行）。

若狭萬次郎編 1939 『新男子音楽教科書教授用書 第三編』東京：共益商社書店。

Winter, Robert and Peter Bogdanoff. 2008. *From the New World: A Celebrated Composer's American Odyssey*. DVD-ROM. Frazier Park: ArtsInteractive.

山口誠 2010 『『聞くスポーツ』の離陸』吉見俊哉、土屋礼子編『大衆文化とメディア』107-136、京都：ミネルヴァ書房（現代のメディアとジャーナリズム第4巻）。

『読売新聞』 1930a 『ハレルヤ』近く入荷」1930年3月29日（朝刊）：10（ヨミダス歴史館）。

『読売新聞』 1930b 「封切外国映画」1930年9月18日（朝刊）：10（ヨミダス歴史館）。

『読売新聞』 1930c 「新映画評 ハレルヤ」1930年9月19日（朝刊）：8（ヨミダス歴史館）。

『読売新聞』 1932 「米国の独立記念祭を祝福する演奏 午後八時 管弦楽と合唱」1932年7月4日（朝刊）：5（ヨミダス歴史館）。

『読売新聞』 1934 「合唱と管弦楽と 午後九時 新響練習所より中継」1934年7月24日（朝刊）：15（ヨミダス歴史館）。

『読売新聞』 1935 「アメリカの音楽 午後零時五分より 木曜コンサート」1935年7月4日（朝刊）：15（ヨミダス歴史館）。

『読売新聞』 1936a 「これが家庭音楽！ 家庭団欒の合奏や夫婦愛の二重奏 前奏曲は近歩二連隊のラッパ吹奏」1936年8月16日（朝刊）：10（ヨミダス歴史館）。

『読売新聞』 1936b 「黒人霊歌とカウボーイの唄」1936年9月22日（朝刊）：10（ヨ

《Goin' Home》から《家路》へ

ミダス歴史館)。

『読売新聞』 1937 「午後八時 アメリカ音楽 歌と管弦楽」1937年7月4日(朝刊)：10(ヨミダス歴史館)。

『読売新聞』 1938a 「交響曲“新世界より”名曲ファンタジー2」1938年2月19日(朝刊)：10

『読売新聞』 1938b 「男声合唱と女声合唱」1938年11月16日(朝刊)：6(ヨミダス歴史館)。

『読売新聞』 1939 「青年学生の音楽」1939年6月25日(朝刊)：6(ヨミダス歴史館)。

【追記】

本論文の校正中に、長門洋平『映画音響論——溝口健二映画を聴く』(みすず書房、2014年1月22日発行)が出版された。長門によると、溝口健二監督の『ふるさと』(1930)にドヴォルザークの交響曲第9番「新世界より」第2楽章がジャズにアレンジされ、パーティのシーンで用いられ、踊りの音楽として機能している(pp.94-95)。つまりこの映画で「ラルゴの旋律」は「故郷」や「家」に帰るという意味をもつものとしては用いられていない。

【付録 1】

《Goin' Home》

Goin' home, goin' home, I'm a goin' home; Quiet like, some still day, I'm jes' goin' home.	故郷に帰ろう、故郷に帰ろう、 私は故郷に帰るんだ。 いつか静かに、ひっそりと、 私は故郷に帰ろう。
It's not far, jes' close by, Through an open door; Work all done, care laid by, gwine to fear no more.	遠くはない、すぐ近くにある、 開いた扉を抜ければ、 すべてのことを終え、心配はない、 何も恐れない。
Mother's there 'spectin me, Father's waitin' too; Lots o' folk gather'd there, All the friends I knew, All the friends I knew. Home, home, I'm goin' home !	母がそこで、私を待っている、 父もまっている そこには多くの人々が集い、 私の友人たちもみんないる 私の友人たちもみんないる 故郷に、天の故郷に、私は天の故郷に帰るんだ！
Nothin' lost, all's gain, No more fret nor pain, No more stumblin' on the way, No more longin' for the day, Gwine to roam no more!	失うものは何もない、すべてが得られる もう悩まないし、苦しみもない、 もう道でつまづくこともない、 もう日の光を求めることもない、 もうさまようこともない！
Mornin' star lights the way, Res'less dream all done; Shadows gone, break o' day, Real life jes' begun.	暁の星が道を照らしている、 不安な夢はすべて終わった。 愁いは消え、夜が明け、 本当の生活が始まる。
Dere's no break, ain't no end, Jes' alivin' on; Wide awake, with a smile Goin' on and on.	途切れることがなく、終わりもない 生き続ける。 すっかりめざめて、笑顔で、 永遠に続く。
Goin' home, goin' home, I'm jes' goin' home; It's not far, jes' close by Through an open door.	天の故郷に帰ろう、天の故郷に帰ろう、 私は天の故郷に帰るんだ。 遠くはない、すぐ近くにある、 開いた扉を抜ければ。
I'm jes' goin' home.	私は天の故郷に帰るんだ。
Goin' home.	天の故郷へ。

年月日	チャンネル	番組名	演奏者	編曲者・作詞者など	タイトル	典拠
1932/7/4	第1放送 (JOBKは別番組)	合唱と管弦楽	佐藤清吉(指揮)／東京セレーナダス／コロナ・オーケストラ	フィッシャー編曲(英語?)	《家路》	『読売新聞』(朝刊)(1932年7月4日:5)。JOAK番組確定表では「曲目未定」。
1934/7/24	第1放送	合唱と管弦楽と (新交響楽団練習場より中継)	山本直忠(指揮)／日本放送交響楽団(新交響楽団) ／東京リーダーターフェルフェライン	フィッシャー編曲(英語)	《家路》(合唱)	JOAK番組確定表 JOBK番組確定表
1935/3/22	第2放送	レコード	[シルクレット(指揮)／エヴァレディ・アワー・グループ 合唱団]*	フィッシャー編曲(英語)	《家路》	JOAK番組確定表 JOBK番組確定表
1935/7/4	第1放送	木曜コンサート	篠原正雄(指揮)／コロナ・オーケストラ／ラジオ・ミン ストレルス	フィッシャー編曲(英語)	《家路》	JOAK番組確定表 JOBK番組確定表
1936/8/16	第2放送	アマチュア音楽	林雄一郎(指揮)／新月会合唱団(男声合唱)	アメリカンインディアン民謡** (英語)	《家路へ》	JOAK番組確定表 JOBK番組確定表 番組確定表および『読売新聞』、『東京朝日新 聞』には具体的な時間は記されていないが、 『大阪朝日新聞』によれば、この番組は午後7時 50分からJOAK(東京)、午後8時20分から JOBK(大阪)、午後9時10分からCK(名古屋)か ら放送された(1936:14)。なお《家路へ》は JOBKからの放送。
1936/9/22	第1放送	合唱:アメリカ民謡	津川主一(指揮)／東京シンフォニックコーラス	津川主一編曲(英語)	黒人霊歌《故郷へ》(無伴奏六声 部)	JOAK番組確定表 JOBK番組確定表
1937/1/24	第2放送	学生青年の音楽	廣瀬和一郎(指揮)／神戸商大グリークラブ(男声合 唱)	神戸商大グリークラブ編曲(英語?)	《家路へ》	JOAK番組確定表 JOBK番組確定表 午後7時30分からJOAK、午後8時30分から JOBK、午後9時10分からCKから放送された (JOBK確定表)。なお《家路へ》はJOBKからの 放送。
1937/7/4	第1放送	軽音楽	久岡幸一郎(指揮)／コロナ・オーケストラ、ユーフォ ニック・コーラス	フィッシャー編曲(英語)	《家路》	JOAK番組確定表 JOBK番組確定表
1937/8/9	第2放送	音楽(レコード)	[シルクレット(指揮)／エヴァレディ・アワー・グループ 合唱団](レコード)	[フィッシャー編曲(英語)]	《家路》	JOAK番組確定表 JOBK番組確定表
1937/12/5	第2放送 (JOAKは別番組)	日曜家庭音楽会 (第一スタヂオに於て)	加藤千恵(独唱)／武澤武(ピアノ)	瀬沼喜久雄訳	《家路》	JOBK番組確定表
1938/4/28	第2放送	昼の音楽(レコード):軽音楽	[シルクレット(指揮)／エヴァレディ・アワー・グループ 合唱団](レコード)	フィッシャー編曲(英語)	《家路》	JOAK番組確定表 JOBK番組確定表
1938/11/16	第1放送	合唱	ユーフォニック・コーラス／多部三郎(ピアノ)	フィッシャー編曲(英語)	《故郷へ》(男声合唱)	JOAK番組確定表 JOBK番組確定表
1938/12/4	第1放送 (JOAKは別番組)	斉唱と合唱	杉江秀(指揮)／ヘンデル混声合唱団	瀬沼喜久雄訳詞、福井進編	《家路》(混声合唱)	JOBK番組確定表
1938/12/23	第2放送	店員の時間:合唱	金直子(指揮・ピアノ)／コーラ・レヂーナ	津川主一作詞	《家路》	JOAK番組確定表 JOBK番組確定表
1938/12/30	第2放送 (JOAKは別の曲を放送)	昼の音楽(レコード)	[シルクレット(指揮)]エヴァレディ・アワ・グループ(レ コード)	フィッシャー編(英語)	《家路へ》	JOBK番組確定表 JOAKでも「昼の音楽」という番組だが、放送さ れた曲が異なっている。

【付録2】

《Goin' Home》から《家路》へ

1939/3/20	第2放送	音楽(レコード)	[シルクレット(指揮)／エヴァレディ・アワー・グループ 合唱団](レコード)	作曲者名の記載なし [フィッシャー編曲(英語)]	《家路》	JOAK番組確定表 JOBK番組確定表には「(JOAK)音楽(レコー ド)」となっているだけで、曲は記されていない。
1939/6/18	第2放送 (JOBKは別番組)	屋の音楽(レコード) トミー・ドーシーとその楽団 軽音楽 「名曲のスイング化」	トミー・ドーシーとその楽団(レコード)		《家路》	JOAK番組確定表
1939/6/25	第2放送	学生青年の音楽	金子仁作(指揮)／大阪商科大学グリークラブ	(英語?)	《家路》(交響曲新世界より) (男声合唱)	JOAK番組確定表 JOBK番組確定表 午後7時50分からJOAK、午後8時25分から JOBK、午後9時5分からCKから放送された (JOBK確定表)。なお《家路へ》はJOBKからの 放送。
1939/8/24	都市放送	独唱、二重唱及合唱(大阪)	内田元(指揮)／JOBK唱歌隊女声部／武澤武(ピ アノ)	津川主一編曲訳詩	《家路をさして》(交響曲《新世界 より》)(女声合唱)	JOAK番組確定表 JOBK番組確定表
1939/9/11	都市放送	合唱	小澤清人(指揮)／ユーフォニック合唱団／多部三 郎(ピアノ)	小澤清人訳詞	《故郷へ》	JOAK番組確定表 JOBK番組確定表
1939/11/19	都市放送 (JOBKは午前の放送なし)	日曜特集講座「教員と家庭の夕」	柴田知常(指揮)／東京市教員合唱団／佐治恒夫 (ピアノ)	津川主一編曲、津川主一訳詞	《家路をさして》(合唱)	JOAK番組確定表
1940/2/1	都市放送 (JOBKはこの時間帯に放 送なし)	中等学生の時間:唱歌と音楽	村山擴也(指揮)／横浜市高等女学校生徒／上田和 子(ピアノ)	水田詩仙作詞、黒澤隆朝編曲	《ふるさとの夢》	JOAK番組確定表
1940/8/21	都市放送	合唱	岡本敏明(指揮)／日本放送合唱団／鈴木敬子(ピ アノ)	古關吉雄作詞、若狭万次郎編曲	《望郷の歌》(女声合唱)	JOAK番組確定表 JOBK番組確定表
1941/4/15	都市放送 (JOBKは別番組)	勤労青年の音楽	石丸泰(指揮)／王子製紙産業報国会合唱／石丸ケ イ子(ピアノ)	瀬沼喜久雄作詞	《家路》(合唱)	JOAK番組確定表
1941/6/10	都市放送 (JOBKは別番組)	勤労青年の音楽	金井馨(指揮)／日産自動車株式会社本社合唱団／ 松崎良夫(ピアノ)	津川主一訳詞	《家路をさして》(合唱)	JOAK番組確定表
1941/6/16	都市放送	軽音楽	仁木他喜雄(指揮)／踏青会／興亜軽音楽団	青木爽作詞、仁木他喜雄編曲	《家路へ》	JOAK番組確定表 JOBK番組確定表
1941/9/13	全国放送	仕事と共に:オルガンとコールアンブレ 独奏(大阪)	オルガン:池田キヌ(オルガン)／吉田長次郎(コール アンブレ)		《家路》	JOAK番組確定表 JOBK番組確定表
「作曲者名の記載なし」以外は、作曲者名が記されている。「訳詞」や「作詞」は『番組確定表』の表記に従っている。						
*演奏者名は記されていないが、ミドルトンの《南へ》とセットで放送している。この組み合わせのレコードは、1931年3月に発売のシルクレット指揮のエヴァレディ・アワー・						
グループ合唱団(『ビクター・レコード音譜目録』1931年3月号)と同じものであることから、このレコードが放送されたと考えられる。同じ演奏者が[]で括られている場合、同様のケースである。						
**「ドヴォルザーク作曲」とも記されている。						